

「最後のコーヒータイム」

愛知県名古屋市 飛田 泉

南日本新聞社賞

病院の喫茶室は、ランチタイムを終えて、思っていたよりすいていた。

私の前に、車椅子に乗った父に、母が寄り添い座っている。パジャマの上に、ベージュのカーデイガンを羽織った父が、

「コーヒーを三つ！」

声を弾ませて注文する。

真っ白なカップが運ばれてくるのを、父は、少年のように目を輝かせて見つめていた。

テーブルの上に並べられたコーヒー。父が、ゆるりゆるりと、不自由な右手を、テーブル、そして、シュガーポットに伸ばす。

私は、「入れてあげる」と言い掛けて、やめた。

父の表情が、あまりに真剣だったから。かたかたと音をさせ、ポットのふたがはずされ、スプーンが、小刻みに震えながら、砂糖をすくいあげる。

息を吸うことを忘れていたのではないかとと思うぐらい、静かに、慎重に、砂糖

は運ばれる。

母のカップにむかって、

「こぼれないで！」

見てみぬ振りをしながら、祈る私。

しやらしやら

砂糖は、きらきらと、こぼれることなく、母のカップに降り注ぐ！

「ありがとう」

ふんわりと母がほほえむ。

父は、満足気にうなづく。

窓の外には、初夏のひざしがあふれている。私の目の前では、父と母の時間が、ゆるりゆるりと流れていた。

